

も、詳に見れば、劔には非ず、佛家に用る所の獨鈷と云物を、八ッ打ちがひたる形也、獨鈷の頭畫かきては三角にて、劔の鋒に似たり、故に誤て輪鋒と喚ぶ也、出羽國の羽黒山の不動袈裟に、此紋を金にて打て付るも、獨鈷にて作りたる紋なるが故なるべし、是を神の紋とするは、かの神と佛とをアヘマゼにする兩部の神道にて用る也、惣字をも俗に神の紋也と云、眞俗佛事編に、按華嚴十地品、十地菩薩の胸臆に有、卍字、又云、如來の胸に大人相あり、其形惣字の如し、此れを吉祥海雲と名づくと云々、翻譯名義集云、按卍字、本非字、大周の長壽二年、主上則天皇后權に制此文、著於天樞、音之爲萬云々、是又佛家に用る字なれば、神の紋と云も、兩部神道の俗説也、神をも人間のごとくに心得て、紋を定るこそをかしけれ、武家の定紋替紋とて、二ツも三ツも用る事ある故、神にも輶繪輪鋒惣字の三ツを神の紋と定しなるべし、神の紋と云ふ事、令式國史、其外正しき古書には曾て見へず、唯後代の俗事なり、

〔遠碧軒記神上〕伊勢内宮の紋は、屋形なり、外宮の紋は、車の輪なり、神に紋ある事不審、俗説か、云不足、祇園天王の紋は、木瓜なり、吉田に六月廿三日に毎年神事なり、其内に木瓜大明神と云一社あり、此素盞鳥尊と云、されば祇園なるべし、今智恩院の内に、瓜生石と云石あり、此所が根本牛頭天王の降下の地にて、此石上に一時に瓜のつる出て、瓜なる奇瑞ありたるといふ、それによつて瓜生石と云、略中祇園の木瓜は、きうりの事なり、今はもつくわと心得て、ぼけの事とおもひ、くはの紋を云ふ、あやまりなり、

〔秦山集雜著〕甲乙錄九〕經晃曰、内宮御紋五窠者、櫻花也、又有屋形御紋圖、上古屋形也、蓋皆非口外之事、外宮有小車御紋、又有倭文御紋、鶴鶴也、其説未詳、倭文地名、産織絹重違調、延經曰、御被有鶴鶴御紋、

〔古老口實傳〕一神宮者、桐竹并小車文形、不用衣裳文也、神御衣文也

〔熱田神社問答雜錄〕問神宮袍ノ紋ハ何ゾヤ、答桐竹也、是蓋神衣之紋ニシテ、昔神宮申下シ著セシ